

室山敏昭著

生活語彙の基礎的研究

本書は、方言語彙論の構築を研究のテーマとされてきた著者が長年の研究と思索とを通して方言語彙論を生活語彙論として、深化、結実された力作である。

本書のはしがきにおいて、著者は、従来の研究の問題点を鋭くとらえられ、生活語彙研究を進めるべきことを確言しておられる。

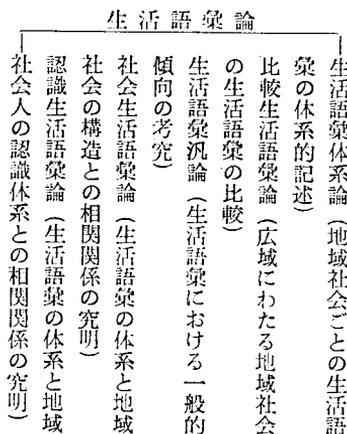
「方言語彙研究の基本的な課題として、前者において設定した語彙体系の帰納と、語彙体系および語彙の量的構造の上に認められる地域差の解明だけでは、なお人間言語学として語彙研究には迫りえないものが残るという思いが、つねに強くあったのである。」「生活の中から生み出され、日々の生活の必要性に基づいて使用され、生活文化の特質を反映する方言の語彙は、その方處性を考究する前に、まず、生活語彙として認識し、その目で徹底的に分析、考究されるべきではないか」（はしがきより）

著者は前著「方言副詞語彙の基礎的研究」で、方言語彙研究の方法論を示されたのだ

が、本書では、その成果をふまえて、方言語彙を生活語彙ととらえ直され、いわば原点にもどって方言と地域生活との関わりを総合的に考究しようとして行われているのである。

本書は大きく、第一部 生活語彙論（理論）と第二部 生活彙の構造（実証的研究）に分けられている。

第一部では、生活語彙研究の目的と方法、学的組織が、具体的に論じられている。生活語彙論の学体系は、おおよそ、次のようなものである。



これらの下位組織が有機的に連関し、全体として、生活語彙論の体系が形づくられている。生活語彙論は、共時論・通時論・高次共時論的研究をふくみ込む、きわめて広い視野をもつ学組織であり、人間の言語生活全般を総合的に考究する、究極の語彙論であると言えるだろう。

第二部では、第一部の方法論に基づいて、生活語彙の構造分析が行われている。対象とされている生活語彙は、漁業語彙、農業語彙、性向語彙、親族語彙の四つであり、語彙分野に偏りがなく配慮されている。分析は徹底して、一文単位の用例を資料としてなされており、一語にこめられた方言生活者の生活実感までも記述し尽くそうとする態度が、生活語彙論をゆるぎなく支えている。

（A5判、七〇〇ページ、昭和六十二年二月十日発行、和泉書院刊、一八、〇〇〇円）

（瀬尾 学）